「歴史家はうしろを向いた予言者」であるか

横田健一

一

皆さん。本日は私の最終講義にかくも大勢の方々が、お集まりを頂きまして、まことに光栄に存じます。お手元にレジュメ代わりの印刷物が配られておりますが、実は、このエッセイは四年前に『歴史教育』という雑誌に頼まれて、書いたものです。私自身の歴史観と言うべきものが、ここに記されておりますので、皆さんに私の歴史の見方をお話し申し上げたいと考えました。もう一つ申せば、私が一九四六年に関西大学に参りまして、それが最初の講義ではなかったかもしれませんが、第二年度の予科生の諸君に開講の講義でこういう話を致しました。第一年度、昭和二十一年（一九四六）度は、その二カ月前に、神戸経済大学予科へ講義に行きまして、その同じノートでやりました。関西大学での書き下しは、第二年度昭和二十二年の四月から予科生の諸君に講義を始めましたときで、生徒であった校友会広報部長の篠原茂一さんにこのレジュメをお目にかけたら、「ああこれは、わたしらが予科生のときに最初に聞いた講義だ」とおっしゃいました。関西大学としては実に四十年前に、こういう話を申し上げた。レジュメに最初に書いたように、昭和十五年三月三十一日私が京都大学を卒業した卒業式の晩に私の先生の西田直二郎教授がお宅へ呼んでくださって、お寿司とお酒をいただいて歓談を致しましたときに、私が先生に「歴史家は後ろを向いた予言者である」ということわざがありますが、こういうことは本当に言えるのでしょうか、と質問をしました。すると先生が、「ある意味でそういうことは言える」―ある意味とは、それはどういう意味であるか、ここに書いておりますように「人間は、個人でも国家でも、あるいは市町村や会社や学校に行っても、常に何らかの理想を持ち、目標を立て、目標を

実現するために計画を立て、その実現に努力をする。その目標を達成すると、また次の目標を立てて、それを実現するために、努力をする。永遠に人間は、その目標や理想の実現のために努力していかなければならない。それが人生であり、また歴史である。」とおっしゃったのであります。これは、まことに至言であります。

我々個人にとりましても、小学校のときには、中学へ入るために受験勉強を致します。中学時代は高等学校へ入るために一生懸命に受験勉強を致します。大学でも同様です。次に就職の場合にも努力しなければならない。就職致しましても、また職場で次の目標を立てて努力をしなければならない。こういうことで、いつまでたっても、これでもうよいといってその努力の終わることはない。

これは国家においても同様です。個人の場合でも目標が挫折することがある。大学の入試に挫折して、自殺をする青年が、世間には少なからず伝えられております。私は西田先生のそのお話を伺いましたときに、このレジュメにも示している、ドイツのカール・ブッセという詩人の詩を思い出しました。

山の彼方の空遠く
幸い住むと　人の言う
我　人　ともに　求めゆきて
涙さしぐみ　帰り来ぬ
山のあなたの空遠く
幸い住むと　人の言う

山のあなたには何だか楽しい楽天地が、パラダイスがあるように考える。この山さえ乗り越えたならば、もうあとは平たんたんとした道が開けておるだろうと考えて人は努力する。大学に入ったならば、もうしめたもので、楽しい学生生活が開かれていると考えやすい。皆さんはいかがですか。大学へお入りになって、大学の四年間はいかがですか。しかし世間には、もっとある目標さえ乗り越えたならば、楽しい生活が永遠に続くように考える人たちが今まで随分おりました。

二

昭和六年私が中学三年のときに、ある先輩からマルキシズムの洗礼を受けました。社会主義、共産主義の社会を実現したら、もう人類は永遠に理想的な、階級のない、階級闘争のない理想的な社会が作られるんだと教えられました。その先輩は、その当時非合法の雑誌でありました『戦旗』という雑誌を見せてくれて、「こういうふうな社会主義、共産主義を実現するために努力をしている人々が沢山いるんだ、そういう革命をなしとげたソビエト・ロシアこそは理想的な社会を

実現している。だから日本でも社会主義革命、共産主義革命をやったならば、あとは理想的な天国のような社会が開かれるのだ。」と、いうことを、中学三年の私に注ぎ込んだのでした。その当時ソビエト・ロシアは、革命後十三年ほどたっておったばかりで、後になってわかったことですけれども、あの当時でまだ第一次五カ年計画の終る前ぐらいでいわゆる国家資本の原本的蓄積のために、農民たちは大変なひどい労働を強いられて、貧窮にあえいでおった時代でありました。しかしながら、我々の耳には理想的な社会が実現されておるというふうなうわさのみが伝わってきたのでした。

確かに社会主義社会、共産主義社会は、私はほんの一端しか瞥見しておりませんけれども、そこに平等の社会が、実現されているかのごとく見えます。しかし、そういう社会におきましても、次々にいろいろな困難な問題の山また山がありまして、その山々をのりこえて、実現するのに大変な努力をしなければならない。御承知のように、スターリンの大粛正によって、一九三七年前後にソビエト・ロシアにおきましては、トハチェフスキ元帥が粛正されたのを初め、はっきりした数はわかりませんが、七百万人が粛正されたと言われております。

中華人民共和国へは、私は二度、関大の先生方と一緒に参りました。確かに平等が実現されており、戦前に言われておりましたような、ノミや南京虫やハエやカがほとんど絶滅された本当に清潔な社会になっておりました。しかし、やはりいろいろな困難な問題を抱えておるらしいことがうかがわれました。大躍進の大失敗、その後の文化大革命が、その初めにおきましては社会主義社会の非常な成功であるかのごとく言われたのでありますが、非常に悲惨な結末が伝えられてまいりました。多くの人々が武闘の結果、自殺に追いやられたり、あるいは粛正されたということがわかってまいりました。

カール・ブッセの詩でいえば、山のあなたの空遠く幸い住むと人の言う、我人ともに求めゆきて　求めていった山を乗り越えるべく努力をした。そして山を越えられず、涙さしぐみ帰り来ぬ。こういうことであります。

三

私は社会主義社会のことばかり申しましたが、日本自体が悲惨な、ひどい大失敗をやってきたことは、御承知のとおりであります。先ほど申しました、昭和六年九月十八日の例の柳条湖事件によって、満州事変が勃発致しました。日本の陸軍は、あるいは日本の政府は、満州に結果としては、傀儡帝国を作りましたが、王道楽土の帝国を作るんだと称して、満州国を作った。そして清朝最後の皇帝宣統帝を呼んできて、

宣統帝すなわち溥儀氏を満州国の「執政」とした。昭和七年三月のことであります。翌昭和八年三月、満州帝国を作り上げましたが、世界はこれに全面的に反対致しました。御承知のようにリットン卿が団長となり、果たして日本が公正なやり方で満州帝国を作ったのかどうか調査をするために、調査団がやってきまして、「これは侵略である」という決めつけを致しました。国際連盟の総会において、日本代表松岡洋右は満州帝国建設の弁護をしましたが、四十二対一という大反対の結果、日本は国際連盟を脱退せざるを得なくなった。果たして、作られた満州国は王道楽土であったか。その結末は余りにも悲惨でした。戦後最近に至るまで、大勢の敗戦時にうち忘れられた、子供たちや、中国に捨てられた子供たちが大勢帰って来て、肉親と悲しみの、あるいは多少の喜びはあるかもしれませんが、非常に悲惨な対面を遂げているということを見てもおわかりだと思います。

また現地の人々にとりまして、悪名高き七五三部隊石井四郎中将の率いる満州防疫部隊が、満州国の満州の現地の人に生体実験をやっていろいろな伝染病の実験に供したという悲惨な結果が、戦後我々の耳に入ってまいりました。涙さしぐみ帰り来ぬどころの話ではありません。王道楽土を変じて覇道苦土とした次第であります。

私たちは、そういう大きな失敗をやりました。満州ばかりではありません。「大東亜共栄圏」と称するものを作ろうとして、フィリピンやタイやインドネシアその他東洋の諸国をどのように苦しめたことか、そしてその戦争の結果二百五十万人の戦死者、そして五十万人以上の非戦闘員の米軍爆撃による死者、そして米軍爆撃によって一一三の都市が焼かれ三百万戸以上の家が焼かれたのであります。そして我々が戦後長い間、いかに塗炭の苦しみに遭ったか、大東亜共栄圏と言われるアジア諸国の人々のみならず我々自身が涙さしぐみ帰り来ぬどころでない、地獄の苦しみをなめた次第であります。これは日本が大東亜共栄圏といっている時代に提携致したナチス・ドイツでもやはり同様です。アウシュビッツで数百万人のユダヤ人、あるいはポーランド人などが、ガス室で殺されたのを初めと致して、いかに悲惨な戦争をやったか。ソビエト・ロシア一国でさえ戦死者二千万人と言われています。

このようなひどい第二次世界大戦争というものも、実はヒトラーが「第三帝国」と言われるヨーロッパにドイツが覇を唱える国を作ろうという理想に燃えて始めたのであります。確かにヒトラーは、多少ある意味ではドイツ人にとってよいこともやったかもしれません。例えばヒトラー・アウトバーンと言われるような高速道路を縦横に作った。そしてそこを走らせるためにフォルクスワーゲンという標準的な安い自動車を大量生産した。こういうことを初めとして、それは確か

にドイツ人にとっては、ある意味で快適な生活を作り出したかもしれません。しかしながら、そこに「犠牲の山羊」「スケープ・ゴート」(scape goat) としてユダヤ人が非情な迫害を受けた。やはり何らかの理想を達成しようというときには、国民民衆の心を一つにまとめなくてはならない。そのためには何らかのスケープゴートを作る必要があるということであります。

日本の場合でもそうであります。共産主義・社会主義が、一つのスケープゴートとして宣伝されたのであります。さらには自由主義者までが、スケープ・ゴートにされた、こういうことです。しかし人間は、やはり、何度そういう大失敗を致しましても、その後も、何らかの理想を掲げ、その理想を実現するために努力をせざるを得ないのであります。

戦後の日本は、どういう理想を掲げたか、そこには確かに敗戦によりまして、思想の自由が得られた。そして最も貴重なものは、永遠に戦争はやめた憲法第九条であります。そして民主主義の国家、自由主義の国家、文化国家を作ろうという理念が掲げられた。その文化国家の理念が果たして実現されたか、どうかは別として、経済的には非常な大成功をおさめて来ました。その経済的な成功については、皆さんも御承知のとおりです。そこには、ある程度の犠牲もあったでありましょう。農地解放によって、大地主の人々は皆土地をはき出さざるを得なかった。あるいは財産税によって、大金持ちは皆財産をとられたり、財産を売らざるを得なくなった、いわゆる売り食いなどと呼ばれる生活が行なわれた。財閥解体も我々は経験してまいりました。戦前にくらべ確かに日本人は平等になりました。爵位というものがなくなった。貴族というものがなくなった。

経済は成功致しましたが、現在の日本は果たしてそれでよいのであろうか。年間五百億ドル以上、昨年は七百億ドルの黒字貿易を実現しております。それでアメリカやEC諸国からは内需開発をやれと強く迫られております。一体、一年間に七百億ドルもどこへもうかっているのかというのが、我々民衆の偽らざる感想であります。いわゆる財テクでもうけている商社、銀行、保険、自動車会社、電気会社等は受け取ったドルを、次々とアメリカの国債・社債・株式などを初めアメリカの動産などの買収や会社合併等に投じて、狂奔しております。受け取ったドルをすぐにアメリカやその他へ投げ返してしまう。そして日本はアジア諸国などからは経済侵略をしているというふうに非難されているのです。我々はいい商品を作って何で悪いんだ、それをアメリカやヨーロッパや東南アジア諸国が喜んで買うんだから、いいじゃないかと言いますけれども、果たしてそうでしょうか。私たち、日本人は、この経済的成功によって世界から富を搾取しているのではな

いかという反省をしなければならないのではないか、と考えるのであります。こういう新しい経済政策については、政治家、あるいは実業家が考えるべきことでしょう。

四

我々歴史をやっている者が直ちに、その解答を出すことは困難です。こういう問題を私は近代史ばかりで申しましたが、古代から人類の歩みを考えてまいりたい。古来数千年の人類の歴史をみると、人類は何らかの理想を掲げ、あるいは目標を持って努力してきたのではなかろうか。人類はどのようにしてこの地球上に出現してきたのでしょうか。私は長らく関西大学において「人類学」を講義してきました。文学部では歴史の先生でしたけれども、全学的には、教養科目の人類学の先生でして、法学部や経済学部・商学部の古い卒業生は私の人類学を聞いたという人が多いのであります。

私は昭和二十四年から、「人類学」を担当してきました。なぜ、そういうことをやり出したか。昭和二十三年にアメリカの人文科学使節団が日本にやってまいりました。日本の人文科学は遅れている。もっとこういう学問をやれということをアドヴァイスしに来ましたのです。五人の教授の団長はストッダード博士でありましたが、関西へは有名な駐日大使になったエドウィン・O・ライシャワー Edwin O. Reischauer 博士がやってまいりまして、京都大学の人文科学研究所に関西の諸大学の代表者を集めてそしてアドヴァイスの講演を致しました。そのときに日本の人文科学は教育学・心理学・人文地理学・人類学・社会学いろいろな学問が遅れている。歴史学においても日本人は日本の学者は古代史や中世史ばかりやって近世史・現代史は一向にやらないじゃないか、こういうことを言ったのであります。

大学に帰ってきて一般教育委員会でそれを報告致しました。こういう学問をやれと言っているから、一つ人類学を教養科目に置かないかと提案致しましたが、だれがやるんだという。「おれがやってやる」と申しまして、やり出したのです。

初年度はテキストもありませんので、ハーヴァード大学教授のクライド・クラックホン Clyde Kluckhohn が出したばかりの "*Mirror for Man*," 『人間のための鏡』その英文を印刷して配り、それでやりました。

人類が地上に成立したのは何年前かわかりませんが、霊長類の原始的な猿が地上にあらわれたのは約六千万年ぐらい前であろうと言われています。そしてこれが次第に発達して、類人猿的なものが発生しましたのは二千万年か千数百万年ぐらい前だろうと言われている。その類人猿の中から人類の祖先が分かれ出たのは二、三百万年ぐらい前だろうと言われて

おります。東アフリカのオルドヴァイ Ordvoi で、リーキー Leaky 博士が発見したジンジャントロプス・ボイセイ Jinjanthropus boisei と呼ばれる化石人骨が大体百数十万年、古く見ても二百万年ぐらい前のものです。これが人間的な骨になっておる類人猿と人類の骨の違うところはどういうところであるか。類人猿は口が長くずっと前へ出ている。だから歯並びが人間の場合には半円形になるんですが、それが楕円形になっている、口先が出ているだけに、あごが後退している。そして額が後退をしている。人類は額がだんだん前に出ている、それだけに前頭葉が発達している。猿のようにあごが引いていて、口先が出ていると、噛む力が強い。大きい牙がある。人間では犬歯（糸切歯）が短い、牙がない他いろいろな身体的特徴はあるんですが、その他でいえば猿は木からぶら下がったりしますので、猿はブラキエーション brachiation をやりますので手が長い。人間は手がだんだん短くなっている。

人類の文化というものが猿と違うところは言葉をしゃべるということにあるのであります。それから道具を使う。道具、すなわち人間は人間の肉体以外の自然のあるもの、石であるとか木であるとかいうのを加工して使う。自然自体を使って、そして人間の生産や闘争などの営みに利用する。もっと発達すると、火を用いる。例えば獲物のけだものの肉を食べるのに、石器を使って皮をはいでそして中の肉を取り出して、やわらかい肉を食いますので歯が退化する。だから人は動物に比べると顎が退化している。犬歯が短くなっている。さらに火を使うようになると、煮て焼いて食べますから、さらにやわらかいものを食べるのであごがだんだん弱くなる。そうすると強いあごをつくるための筋肉が弱くなりますので、あごが引き締められないで、だんだんとあごが前へ出てくる。また額の締められている筋肉が弱くなりますので、額が発達する、前頭葉が発達するなど、いろいろなことが言われております。

人間を特徴づけるのは言葉というものです。言葉というものは動物のように叫び声だけではなく、その叫び声をアーティキュレーション articulation といい、音をはっきり発音致しまして、それを組み合わせて、無限に概念を形成して、概念を組み合わせて、自分の意思を表現していくことができるのです。このような言葉を人間が持ったときに、さらに言葉を組み合わせることによって、自分の思想を相手に伝達することができるのみならず、これを記憶によって保存し、他人に伝達することができる。その保存が、さらに文字を作るとき、より的確に後世まで保存できる。こういうことによって、人類の文化というものが発達してまいります。道具も人類が早くから石を加工致しまして、石器を作る。最も原始的

な石器は百万年以上前にさかのぼる時代から作られているのですから、次第に精巧な石器ができるようになる、そして中石器時代になりますと、弓矢が発明され既に旧石器の末期におきまして、投げやり、あるいは投げもりが発明されておりましたが、飛び道具ができる。弓矢は投げやりと違って木の弾力を利用することによりまして、人間の力の及ばない距離まで道具を飛ばすことができる。そこに人類の道具に関する文化は一段と飛躍をした。そしてこの中石器時代から犬という家畜が出現してきます。間もなく新石器時代、今から申しますと八、九千年前、紀元前六、七千年前ぐらいから新石器時代に入ります。そう致しますと、ここに農耕が出現致します。もっと早くから農耕はあったかもしれません。小麦・大麦こういう麦類を西アジアの豊かなる三日月地帯と言われるチグリス・ユーフラテスからナイル川の流域にかけてのアフリュアント・クレッセント Affluent Crescent と呼ばれる地帯において小麦の栽培が始まる。また羊及び牛の飼育が始まった。このように野性の禾本科植物ないしは有蹄類というもののドメスティケーション・カルティベーションによりまして、人類はそのような食料を保存することができるようになる。ここに大きな文化の発達がみられます。東洋におきましては、やや遅れて豚の飼育に、キビやアワや稲の栽培が始まりました。

五

このような時代までの旧石器人がどのような理想を持ったか、それはわかりません。しかし旧石器時代の末から石製の人形が作られた。石で作った人形のようなものが出てまいります。それは非常におっぱいの大きな、おなかの大きな豊かな肉体を持った女性像が多く作られておりました。考古学者はこれは大地母神、大地の女神・母神の像であろうというようなことを申します。そういう豊かさのシンボルを崇拝するという一種の宗教が始まっているのではないか、偉大な力を崇拝することが始まっているのではないかと言われているのです。そういう旧石器の末期から死体の見方などでも一種特別の見方が始まっております。墓地が作られて、その骨などにも一種の独特の加工をしたりする。また赤色顔料などが附色される傾向が始まってまいります。人類の文化は、ただ単に物質文化ばかりではなく、何らか死体にも魂を認めるような宗教、一種の精神文化のごときものが出現して来ます。新石器時代に入りますと、そのような傾向が、ますます顕著になって来ます。そして青銅器が、今から申しますと五、六千年前ぐらいに始まる。BC三千年から三千数百年ぐらい前には青銅器時代が、先ほど申しました豊かな三日月地帯のあた

りから始まって来ます。

インドでは若干遅れてBC二千年前、中国ではBC千五、六百年前から青銅器時代になって来ますと、ますます、そういう宗教的文化が色濃く現れて来ます。ドイツの哲学者カール・ヤスパース Karl Jaspers がいっておりますように、この「枢軸の時代」"*Achsenzeit*" と言われる時代、すなわち今から申しますと、今から二千五百年前、BC五百年前にインドにおいてはシャカが出現する。中国においては孔子が出現し、そしてギリシアにはソクラテス次いでプラトンが現れてまいります。ヤスパースの "*Die Ursprung und Ziel der Geschichte*"『歴史の源泉と目標』という書物があります。それにこのような「枢軸の時代」と申しまして、今から二千五百年前に東洋にも西洋にも、ほぼ同時に偉大な知恵を持った宗教、偉大なる哲学者というものが現れてきて、これを枢軸の時代とヤスパースは言うのです。このような偉大なる哲学・偉大なる宗教というものが現れたということに、人類というものが、それまでの人類と違って精神文化において一段と豊かになり、飛躍するに至ったと言うことができるのではないだろうかと思うのであります。

恐らく、それまでの人間は理想あるいは目標として物質的な財産を持ちたいと思ってきた。新石器時代になって動物のドメスティケーションによって羊や牛を養うようになった。麦の栽培によって農耕地を持つようになった。そのような私有財産を持つに至った人間は無限にその欲望を膨らませるに至る。もっと牛や羊が欲しい。五百頭・千頭の牛や羊では満足できない。五千頭も一万頭も欲しい。農耕地を百エーカー二百エーカーでは物足らない。千エーカーも二千エーカーも持ちたい。そのような欲望から戦争をおっ始める。そして打ち勝った方は大きな牧場主農場主になる。負けた方の人民を奴隷にするといったような経済的形態が始まる。やがて原始的な国家というものが形成されたでしょう。そのような時代が何年か続きまして、そしてヤスパースの言う「枢軸の時代」、偉大な哲学・偉大な宗教が生まれた。キリスト教はこの偉大な宗教の時代から五百年ほど遅れましたが、既にヘブライ、古代のイスラエルにおきましては、多くのキリスト教の先駆者である予言者たちが現れております。

六

私は本日、予言という言葉を使いましたがそのような予言者は、やはりこの枢軸の時代と言われる時代よりも、やや早く現れ始めておるのであります。いろいろなことを申してまいりましたが、多くのばあい、人類の目標というものは物質的な目標、物質的な理想を掲げて来ました。先ほど来申して

おりますように、例えばヒトラーの第三帝国あるいは日本が失敗を致しました満州の王道楽土、あるいは大東亜共栄圏などという目標は、多分に物質的なものを目標としたものでありました。そこには他の民族を納得せしめ、信服せしめるだけの精神的な偉大さというものに欠けておったと申さねばならないのであります。

私たち昭和十五年の京大卒業生の予餞会が、南禅寺で行われたときのことであります。先生方がはなむけの言葉を語られた中に、法学部の教授で昭和十三年度に私たちに日本法制史の講義で「武家法における道理」を講ぜられた牧健二先生は、今は九十歳を超えられていると思いますが、次のような意味の話を我々に対するはなむけの言葉とされたのであります。

「わしは憂鬱じゃ。先日中国を視察してきたが日本軍は点と線を抑えているだけで、日本人は中国人からさっぱり信用されとらん。尊敬されとらん。はっきり言って戦争は成功しとらん。日本は負けるかもしれん。わしは憂鬱じゃ。」

もう心ある人々は、いわゆる大東亜戦争が始まる前でありますが、中国を見てきた人々の中で、歴史を見る目のある人々は戦争に負けるかもしれんという予感を持っておった。日本人も日本軍も中国人を信服せしめるだけの精神文化を持っていなかった。これは日本の非常に痛い弱いところでありました。やはり文化というものは、他の民族を納得せしめ、尊敬せしめるだけのものを持たねばならないのであります。果して、今日の日本文化で、他の外国の諸民族に対して誇れるものは何があるのでありましょうか。その多くは外国から受け入れたものに多少日本的な味をつけたものではないでしょうか。

確かに日本人の持っております文化、例えば我々は飛鳥・奈良時代の文化を誇りに致しております。法隆寺は世界で一番古い木造建築ではないか。それに次いで薬師寺の東塔、薬師寺の薬師三尊像、唐招提寺、東大寺、そこにはすばらしい七世紀から八世紀の仏教文化がありまして、我々はインドから中国を経てこれを受け入れたのでありますが、中国にはそういう古い仏教文化は残っていない。私たちは昭和五十六年に中国で一番古い木造建築の残っている、五台山に行ってみたいと思った。五台山には九世紀、日本でいえば平安初期の木造建築の寺が残っております。そこは中国の軍事施設があるから行けないということで、網干善教先生の御尽力があったんですが、行けない代わりに山西省の大原から天竜山の石窟寺院に登らせてくれました。太原には中国でその次に古い木造建築が二つある。どちらも大体十一世紀の中ごろ、日本でいえば宇治の平等院の鳳凰堂に匹敵するような建築があります。日本は中国の文化を受け入れましたけれども中国に残

っていない唐代初期にあたる法隆寺や薬師寺や盛唐にあたる唐招提寺を持っております。

しかし元はといえばこれはインドから始まった仏教であり、唐代に発達した形の文化です。神道これは日本の誇るべき文化でありましょう。確かに伊勢神宮というものは千数百年の歴史を持ってそして今に至るまで伝えられてきた非常に荘厳な、厳粛な、清らかな、宗教的な礼拝の対象でありますが、果たして世界の諸民族をその前にぬかづかしめるだけの教義や哲学体系を持っているでしょうか。造形文化を持っているでしょうか。

その他日本の工芸品、陶磁器、これは欧米人はチャイナと申して中国だと、それに対して漆器これはジャパニーズ・ラッカーと英語ではいいますが、確かにジャパニーズ・ラッカー、漆器というものは日本の古い技術のすぐれた文化であります。既に縄文時代に陸奥の是川遺跡から漆器が出ておりますけれども、これが世界じゅうの人に愛好はされても、日本人はそれによって尊敬されるかどうかということについては、我々自信がありません。ジャパニーズシルク、絹織物これは確かに優れた工芸品です。京都の西陣でつくる最高の製品というものは世界の人々に喜ばれている。絵画彫刻いろいろな文化においても、日本の工芸品は確かに優れたものを持っておりますが、しかし先ほどから申しておりますように、日本は五百億ドル、七百億ドルの外貨を今黒字貿易で獲得している。そして世界じゅうの人々から非難されている。一種の経済侵略と言われておりますが、そういうものに打ちまさって世界の人々に尊敬されるゆえんの何物かを持つことができるでありましょうか。

七

太平洋戦争に負けましたときに、私は海軍兵学校舞鶴分校、その前は海軍機関学校と呼ばれた学校の教授を致しておりました。文官教授であります。海軍機関学校というのは、今の学校でいえば工学部みたいなもので機械工学、電気工学とか燃料の石油に関する石油化学とか土木工学、陣地を作るのは機関学校を出た人がやります。航空工学、建築工学とかいろいろな専門家がそういう専門講義をしている学校でした。ですからただ単に勇ましいだけではないところがありまして、太平洋戦争が始まる直前、昭和十六年十一月二十三日に私は舞鶴の水交社で晩飯をとっておった。同じテーブルに林寿三重機関大尉と小沢信彦大尉という通信科の教官がおりました。十一月二十三日ですからあと半月で太平洋戦争が始まるころ、いわゆるアメリカ国務長官コーデル・ハル Cordell Hull のノートが十一月二十日に出たんですから、私は戦争が始まる

だろう、避けられんだろうなとそういうことを言っておった。「どうです。あんたら勝つと思いますか」と聞いた。彼らは「勝つ自信がないな」という。

大体海軍大尉は二十四、五歳ぐらいで一番張り切ったところなんですが、私自身はその当時満二十五歳、数えで二十六歳ぐらいで大体同年齢の連中でした。「あんたら勝てんと言うが、だったらどういうところが弱いんだ」ときくと、彼らは、「日本海軍はアメリカ海軍に十年、科学技術で劣っている。日本陸軍は日本海軍よりまだ十年おくれている。特に飛行機はアメリカ海軍の方が日本海軍よりええ」こういうことを言うんですね。一番張り切りどころの大尉の連中がそういうことを言う。やはり太平洋戦争というものは下っぱの連中でも、技術者は余り自信がなかったんですね。まして上の方の連中というものは自信を持っていなかった。このごろ海軍大将井上成美などという阿川弘之の実録小説などによっても御承知のように米内光政海軍大臣、山本五十六次官、井上成美軍務局長等の海軍の非戦派の人たちはアメリカの力というものを知っておったので、ヒトラー、ムッソリーニと同盟しようという昭和十五年九月二十七日に結ばれたあの三国同盟締結に強く反対しておった。

八

しかしこういうことを言っても仕方がないので私は終戦のときのお話しを申し上げます。戦争に負けたそのときに軍人連中は「もうこれでわしらの時代は終わった。これから君ら文官の時代である」といって、一週間の特別教育に軍人は一切講義はやりません。文官教授ばかりが一週間特別講義の時間を持ったのです。私も一こまやれということで講義を致しました。海軍兵学校における最終講義でどういうことを私は言ったか、その前に私は講義をする少し前にしたものでありますが、海軍兵学校にも海軍兵学校参考館といって卒業生の日清戦争や日露戦争などの戦死者の血染めの軍服とか血染めの軍帽とか短剣とかが、たくさんありました。それを次々に火の中にほうり込んで重要書類とともに焼いたその晩に、必ず復讐をするぞとか仕返しをするぞとか、そういうことを言う生徒が非常に多かった。最終講義で生徒に向かって

「君らは復讐をするとか仕返しをすると言うけれども、そんなことをやっても仕方がない。わたしは、アメリカの占領軍はもう今後五十年、百年、日本を厳重な占領下に置いて戦争をできるようなことはせんと思う。それよりもアメリカ人に尊敬されるような文化を持て。『おのれを知り敵を知る者

は百戦危うからず』と中国の兵法学者孫子は言うが、アメリカ・イギリス・ソ連・中国・フランスなど今まで敵であった国々に日本を尊敬せしめるような文化、精神文化を持たなければ、今後、日本の国の存在の価値はない。そのためには、どうするのか。そういう人たちに尊敬されるためには、まず相手の文化を知らねばならない。アメリカの文化、イギリスの文化、ソ連の文化、中国の文化、フランスの文化を知らねばならぬ。そのためには彼らの言葉をやらねばならぬ。アメリカの言葉をやる。イギリスの言葉、フランスの言葉、ソ連の言葉、中国の言葉、まずそれを知ってそういう国々の文化を研究せよ。同時に、おのれを知り敵を知ることが必要だから、是非日本の文化も知ってくれ。だから日本の古代以来の文化伝統というものを深く研究し、それを徹底して深めたならば、日本は戦争に負けたけれども、精神文化において君らの言う復讐をすることができるだろう」

こういうことを最終講義で申したのであります。果たして現在の日本がそのような私の申したような一種の平和国家・文化国家となるべき目標を実現し得たかどうかは存じません。しかし戦後四十二年間遅々たる歩みかもしれませんが、そういうふうな目標の実現をやってまいったかと思うのであります。しかし、どちらかと言うならば日本人は経済的物質的な繁栄のみを追求していて、精神的な高い文化の実現において、私たちは努力不足であった深い反省が必要であると思うのであります。敗戦後、たった四十年間でそんなことをやり遂げるということは、もちろん無理でしょう。私が皆さんのお手元に配ったレジュメにも記しておるように、徳川家康の言葉と言われている、

「人の一生は重き荷を負いて遠きを行くがごとし。急ぐべからず。」

であります。急ぐべからず。私が京都大学の一回生のときに考古学の浜田青陵（耕作）先生の最終の講義をうかがいました。浜田先生は昭和十二年四月私どもが入ったときに考古学概論を御担当で七月には総長に昇任されてたった三カ月で講義をやめられたのであります。

そしてその一年後、昭和十三年の七月に五十八歳でなくなられました。私ども学生にとっては、五十八歳というのは、えらいじいさんやなと思っていましたが、私が七十歳でこういう最後の講義をするんですから、われながら何とまあおじいさんになったものだなと思うのであります。この浜田先生が、幾つか私どもの印象に残る言葉をおっしゃったのであります。考古学自体に関しては土器というものは考古学の基本だからしっかり勉強せよとおっしゃいましたが、私がいまだに肝に銘じておりますのは《Slow but Steady》〝スロー〟ゆっくりと、しかし〝ステッディ〟着実に研究を進めよ、こ

ういうことをおっしゃったのであります。先生は、原稿というものは一日に一枚書いても三百六十五日の間には三百六十五枚書けるんだ。三百六十五枚書いたらちょっとした本が一冊できるんだ。だから一遍にたくさん書こうとはせずに、毎日一枚二枚でいいから原稿を書け。これは私は実行しておりません。まことにお恥ずかしい次第ですけれども、これはなかなか難しいことであります。本当に難しい。私なんか原稿の締切り期限が来るか、それを過ぎてから、えらいこっちゃ、といって徹夜して一晩に二十枚三十枚書き飛ばすというようなことをしょっちゅう致しておりました。

ですから私は今まで一生の間に何百回か徹夜したかと思いますが。これは私の非常に世話になった日本の古代史、朝鮮古代史の研究の大家であった三品彰英先生、私を海軍機関学校に引っ張り込まれた先生で、教官室、つまり研究室におりますと、毎日午前中原稿を三、四枚書かれるんです。紫色の罫線の入った二百字詰めの原稿用紙に一日に三枚、四枚です。一月たちますと百枚近くになる。三カ月たちますと三百枚ぐらいになる。そしてそれをどこかの学術雑誌に投稿される。そして一、二年たちますと、本になって出版されてくる。「私にはできんことだ」と思いました。

九

この《Slow but Steady》という浜田耕作先生の衣鉢を継がれたのが、関大名誉教授末永雅雄先生がそういう方ですね。

『常歩無限』という本を最近お出しになりました。「関西大学考古学の二十年の歩み」という副題がついています。常歩は、馬を走らせるときの用語です。末永先生はちょうど大正中期に大阪城内にあった騎兵第四連隊に入隊しておられた。ですから、騎馬の用語を使われるんですが、常歩とは並足ですね。並足でゆっくり歩くと無限に歩み続けることができる。末永先生の九十年の生涯は、まさにそれではないかと私は思います。さればこそ、あれだけすぐれた大きな本をたくさんお書きになった。昭和一桁のころに『宮滝の遺跡』という縄文晩期と天武持統天皇の離宮の遺跡の研究を初め、学士院賞を昭和十一年にお受けになった『日本上代の甲冑』、それの姉妹編の『日本上代の武器』等膨大な本であります。『大和国島の庄、石舞台の調査』、『大和、唐古彌生式遺跡の研究』、戦後はまた『和泉黄金塚の調査報告』を初めとして実に膨大な著作を次々に出しておられます。これは先生が常歩無限でやってこられたからで、我々はまさに先生の爪の垢(あか)でもせん

じて飲みたいくらいに思います。その他にも『橿原』遺跡の報告や『古墳の航空大観』など多くの大著がありますが、それを常歩無限のごとく歩み続けられた。発掘のたびに膨大なる調査報告研究書を出してこられた。やはりこういう研究成果こそ、われわれをして脱帽せしめ、尊敬され、矍鑠として、やって来られた末永先生はそういう方です。

ところで日本の人間として、日本国がやはりただ単に金もうけをして年間七百億ドルの金をもうけた。またのほほんとしておっていいのか。今申しあげたように、多くの末永先生のような方が、学術や文化の色々の方面で成果を築くことがあって、初めて日本の国は世界の国としてその安全を脅かされることなく平和的な文化国家として他国から敬まわれ、存立できるのではなかろうかと思うのであります。大変難しいことでございますけれども、私はもっと現在の日本の政府が経済のみならず、文化に対して、その重点あるいははっきり言えば、お金でも、文化や芸術教育に学術に注いでほしいと思うのであります。

それには現状は余りにも無策ではないでしょうか。関西大学がこの百周年の記念事業に五十億からのお金を使ったわけでありますが、そのために募金を致しました。その手段として寄附者の課税対象としての年収から募金額が基礎控除になるようにしています。私は百万円寄附致しました。それが年収課税対象から基礎控除になっております。こういうことはアメリカあたりは非常に早くからやっておりまして、大学あるいは博物館や美術館や何かそういう公共の教育文化の事業に寄附を致しますと、それは年収から基礎控除になる。これをもっと広く適用致しますと大勢の人がもっと文化や学術研究などに寄附をするようになるのではないか。それは政府の税収入は減るかもしれない。しかしアメリカの戦闘機や爆撃機を買うために税金をとられるのは嫌だという人に、博物館や美術館のためなら寄附はいとわんという人も多いんじゃないでしょうか。こういう政策一つをとっても、もっと文化学術の振興ができるのではないか。日本にもっとそういう精神文化を高める必要があるということを先ほど申しました。日本人は、ただ単に物質文化ばかり重んじているのではないということを申しました。しかし物質文化と精神文化というものは、相呼応する面があるのではないだろうか。こういうことを私は折に触れて思います。

私はよく奈良へ参ります。東大寺の大仏殿をみると、この現在の大仏は台座から下だけが天平のものであって、それから上は鎌倉時代再建のときのものがほとんどで、顔は元禄の第三建のときのものだと言われております。ようこれだけばかばかしくでっかいものを作ったなと言えば、それまでですが、しかし聖武天皇はなぜ、ああいうものをお作りになった

か、それは天平八年から九年にかけて天然痘が大流行致しまして、何十万人の人が死んだ。また飢饉もあって、そのほか天平九年には、新羅との国交が怪しくなって、その上天平十二年に九州で藤原広嗣の大反乱があって、そういう災害を守るために、ああいう仏像を作られた。そういう天災を救いたいということを考えられた。考え方によっては、ああいう馬鹿でっかい、つまらんものを作って人民を搾取した、けしからんという考え方もできるかもしれません。しかし今まで世界で残っている宗教・芸術文化というものの偉大な文化は、やはりそういう宗教的なものが基礎になっています。私はここへやってくる前に心斎橋の「そごう」で「大ヴァチカン展」を見てまいりました。そこには、ミケランジェロやラファエロなどを初めとする、偉大なルネサンス時代の芸術家が作ったヴァチカンの建築等の展示は、絵画や写真でありますけれども、優れた芸術の結晶がヴァチカン Vatican です。私もローマ滞在中に三度行って見ましたが、こういう芸術は、それは莫大な富の集積といえば集積によって作られたものであります。やはりそういうものが後世に残るには、やはり文化と申しましても、ただ単純に「南無阿弥陀仏」さえ唱えていたらいいんだといってよいでしょうか。それも偉大なる精神文化でありますけれども、しかし、やはり、その「南無阿弥陀仏」と唱える精神文化を何らかの形に表わすということになりますと、それはいろいろな形の阿弥陀仏といえば、法隆寺の橘夫人の念持仏の阿弥陀三尊像が法隆寺の宝蔵にあったりするのを初めと致しまして、優れた国宝の阿弥陀像、例えば大原の三千院のそれなどにもあります。そういうものは、いっぱいありますが、やはり、そのような宗教文化の伝統が、私は何らかの形で、今後の日本の精神文化を高めていくのに必要ではないかと思うのであります。

十

そして、我々は学問をやっておる人間でありますが、学問をやるということ、これは、いろいろな方面の学問があります。それは私どもがやっている歴史学や哲学や文学、あるいは法律学、経済学を初め、理科系の医学、理学、農学や工学やいろいろありますが、それぞれの分野において優れた研究業績を高めるならば、そこにおのずと日本人は世界から尊敬される平和国家、文化国家としての生命を保っていくことができるのではないかと思います。これは個人になりましては、ある目標を掲げて、自分の研究目標はこれだ、それを実現するために、ある目標の山を乗り越えようとする学問の場合には、それは失敗して「涙さしぐみ帰り来ぬ」ということもあるかもしれませんが、学問の場合には、一つの小さな研究目

標でも乗り越えることができる。その次に山を乗り越えて、「涙さしぐみ帰り来ぬ」ということではなく、山を乗り越えること自体に非常に大きな喜びというものが、常に感ぜられるのではなかろうかと思うのであります。

私は関西大学で四十年間勤めさせていただいた。そして多くの優れた先輩同僚の先生方と学問の話をし、またゼミナールにおいて多数の学生諸君と議論をした。私のゼミの学生諸君は第一回の方からいえば、二千人を超えると思うのでありますが、その学問を議論をすることに常に喜びを覚えてまいりました。私の書いた研究論文、幾つかあるのか勘定したことはありません。二百か三百か短編まで入れれば四、五百はあるかもしれませんが、学生諸君との学問的な議論をする間に得たアイデアが非常に多いのであります。その点で私は実に関西大学で四十年間学ばせていただいて非常に幸せであったと思います。センチメンタルに言えば、このレジュメの二ページの上の段に若山牧水の歌を書いておりますが、

幾山河　越えさりゆかば　淋しさの
　はてなん国ぞ　今日も旅ゆく
今日もまた心の鉦を打ち鳴らし
　打ち鳴らしつつ　あくがれてゆく

私は二十才ぐらいから学問に志しまして、日本の古代文化を明らかにしたい。それを東洋の文化あるいは世界の文化全体の中で明らかにしたい、という目標を掲げて幾山河越えさりてまいりました。また今後さらに越えてまいるでありましょう。その心の鉦を打ち鳴らしつつ憧れて行こう、と思っています。

このレジュメの第二枚目の方には、「歴史家は予言者であるかどうか」と問いました。こういうことは、私は枝葉末節ではないかと思うのでありますが、しかし偉大なる歴史家あるいは哲学者は、私の個人的な体験から見ると、さらに進んだ前途を見通した偉大なる予言者がおると思うのであります。レジュメの二枚目に書いておりますように、昭和二十一年の初夏のころに六甲道駅前の露店の本屋で Bertrand Russell *"The Problem of China"* 1922を見つけました。大正十一年に彼が北京大学へ講義に参りましたとき、ワシントン会議の直後の著です。ラッセルはこの本の中で、日本は貧しい国だから中国へ侵略するだろうと、そしてどういうふうに侵略するかを政治的経済的な考察から予言しております。アメリカは中国側に立って参戦し、そしてアメリカが勝つ、日本は負けるという予言をしております。勝った後、アメリカは帝国主義 インペリアリズムに「乗り出す」launch という言葉を使っております。

私はこれを読んだときに本当に電撃を受けたかのごとく驚いたのであります。その前に昭和十六年初夏、フランスがヒ

トラーのために昭和十五年の初夏に電撃戦でやられた一年後のことであります。ポール・ヴァレリー Paul Valery の「バリエテ」"*Variété*" を読んでおりました。「方法的制覇」という論文があります。これが書かれた十九世紀の末に、ドイツが組織的計画的な方法体系的な構想によって、ヨーロッパを制覇するであろうと、十九世紀末の一八九〇年代に見とおしたことは驚異的だと思います。半世紀近く前に既にヒトラーを予言しているのに、実に愕然とした覚えがあります。またオウエン・ラティモア Owen Lattimore の "*The Solution of Asia*" という本を、昭和二十三年（一九四八）関大の図書館にある本で読みました。革命前に蔣介石の国民党は、毛沢東の共産党に負けるということを予言しているんです。まだ中華人民共和国が一九四九年十月に成立する前です。こういうふうな包括的な世界史の見方をする人々にとっては、こういう未来が予言できる。私は歴史の学問が、そこまでやはり洞察力を持たねばならんということを痛感する次第です。ちょうど与えられた時間が参りました。つたない最終講義を終わりまで御静聴いただきまして、ありがとうございました。

（一九八七、三、一四）

（関西大学名誉教授 [redacted]）

付記

文学博士横田健一先生には、昨年九月三日に満七十歳のお誕生日をお迎えになり、本年三月末には、大学の定めによって定年御退職なさいました。本講義録は、先生の御退職を記念して、去る三月十四日午後二時より三時半まで、関西大学千里山学舎の法文視聴覚特別教室で行われた先生の最終講義の速記録であります。

先生は、戦後まもなく昭和二十一年六月、招かれて関西大学教授に御就任になり、爾来、御在職実に四十年余の長きに及びます。その間、昭和二十四年にはひとり史学科創設の衝に当られ、二十九年には大学院日本史学専攻修士課程を、さらに四十九年には同博士課程を開設されるなど、本学史学科の中心となり、その充実と発展に尽瘁されました。関西大学史学・地理学科の今日の隆盛は、まったく先生のお力によるものといって過言ではありません。

先生は日本古代史を専攻され、名著のほまれの高い『白鳳・天平の世界』（創元社）、『日本書紀成立論序説』（塙書房）、『日本古代神話と氏族伝承』（同上）の三部作をはじめ、その論考は枚挙にいとまがありませんが、御専門の古代史のほか、人類学・民俗学・考古学・近代史等にも御造詣が深く、人類

学や民俗学の分野では、『人類学要論』（樋口隆康と共著・ミネルヴァ書房）などの著作や『フイリッピン民族誌』（A・L・クローバー原著、三省堂）などの訳業があり、昭和四十三年にはみずから調査隊を率いて遠くフイリッピンのミンドロ島にまで足を伸ばされ、同地のマンギャン族の調査に従事されたこともあります。また近代史に関しては、『日本のマッチ工業と滝川儀作翁』という隠れた名著のあることは知る人ぞ知るところであります。また本学の学史の編纂にも多年にわたって心血をそそがれ、『関西大学百年史』の刊行にいたるまで終始熱心に尽力されましたが、これまた先生の近代史のお仕事の一部と考えることができます。

このように先生の学問的関心はすこぶる多方面にわたり、加うるに生来の博覧強記と相まって先生独特のスケールの大きな文化史的学風を形成されましたが、しかも他面、個々の史料解釈に当っては堅実無比であり、かつゆたかな洞察力に富む歴史解釈は、余人の追随を許さぬものがあります。今この講義録を読み返してみて、先生の学問の魅力の結晶をここに見出すことができるように思います。

当日は学年末休暇中にもかかわらず、多数の同僚教員・学生、及び卒業生の方々がお集まりになり、視聴覚教室に溢れるほどでした。終始熱心に聴講され、それぞれ深い感銘をうけられたことと思いますが、なお不参の方々も少なくなかったと思われますので、ここに速記録を掲出した次第です。

なお、この最終講義終了後、会場を大阪梅田の新阪急ホテルに移し、横田先生古稀記念会を開催し、三百余名の方々が列席され、先生の古稀をおよろこびするとともに、先生の多年にわたる御高績をたたえました。そしてその席上、後学・門下生の力作百七篇を集めた『横田健一先生古稀記念文化史論叢』上下二巻が先生に献呈され、盛会裡に会を終了したことをつけ加えておきます。

（関西大学教授　蘭田香融）